

KG Boy & KG Girl

人生を豊かにする 現代美術の魅力

嘉納 秀樹 × ギャラリー「Space31」主宰

半田まゆみ × ヘアメディア・プロデューサー



大手印刷会社社員から一転、ギャラリー経営をスタートさせた嘉納さん。ヘアアーティストの道を歩み、現代美術に深い関わりをもつ半田さん。経済学部と法学部出身のお二人が、アートの世界へと足を踏み入れたきっかけとその魅力を語り合いました。

人との出会い アートの出だし

嘉納 今日、お会いする前に著書を読ませていただいたのですが、半田さんはすごくバイタリテイがあった、多方面でクリエイティブなお仕事をされているなあと驚かされました。現代美術に関しては、やはり嶋

本昭三さんとの出会いが大きいのですか。

半田 嶋本先生とは、美術短期大学生のファッション撮影会のイベントで出会いました。ともに関学出身だったことから話が弾み、それ以後、私にとってかけがえのない師匠になりました。当時、すでに世界的に有名な前衛芸術家でしたから、一緒に海外の展覧会へ出掛けるなど、現代美術の世界でさまざまな経験をさせていただきました。嶋本先生との出会いは私の人生を変えた大きな出来事で、一番幸せなことです。

嘉納 私はもともと絵を描くのが好きで、大学時代はグラフィックデザインに取り組んでいました。友人と3人でチームを組んで写真を撮った

り、デザインをしたり。でも、ポストターやチケットのデザインをするたびに、印刷の仕上がりが思ったようにならないのがどうにも気に入らなくて。それで、興味を持って印刷会社に就職しました。企画・制作を希望していたのですが、面接で営業に

向いていると思われたのか、営業に配属されてそのまま43年間。知らない間にクリエイティブな世界から遠ざかっていきました。

半田 では、ギャラリーを始められたのは、やはり現代美術家である奥さまの影響が大きいのでしょうか。

嘉納 創作活動からは離れてしまいましたが、絵が好きなのは変わらなくて、友人が「君と気が合いそうな絵を描く女性がいるよ」と紹介してくれた

をされているのは珍しいのではないですか。

半田 祖父、父が理容師・美容師養成の専門学校経営者で、母も美容師と、理美容業界に近いところで育ってきたのですが、最初はこの業界に進もうと思っていませんでした。中学、高校は甲南女子学園で、当時は良妻賢母といった教育でしたので、大学ではのびのび自由に過ごしたい！と関学の法学部を選びました。それでも、3年生になって周囲が就職活動し始めると、「やっぱり自分はものを創り出す仕事したい」と思うようになり、ダブルスクールで美容師免許を取得して、この業界に入りました。ただ、単に技術だけを提供するのはなく、ヘアをアートとしてクリエイティブな表現ができないかとか、文化としての髪や化粧ということも考えていました。

嘉納 私は経済学部でしたし、大学でアートについて直接学ぶことはありませんでしたが、1回生のゼミで澤瀉久孝の著書で「自分で考える」ということが課題図書になったことをよく覚えています。何事にも正解はないし、誰かにやれと言われてするのはなく、何をすべきかを自分で考えるということを自然に教わった気がします。社会人になってからクリエイティブから遠ざかっていったと言いましたが、大学を卒業後、友人たちと西宮でギャラリーの企画に参加したことがあります。演劇や



半田まゆみ(はんだまゆみ) 尼崎生まれ。1986年法学部卒業。世界的前衛芸術家の嶋本昭三氏に師事。世界各国で「髪」をテーマにした講演やパフォーマンスを展開してきた。著書「私らしくあわせになる方法」など。

音楽ライブをしたりユニークなギャラリーでしたが、自分たちで考えて何かを作り出すというのがやはり好きだったんですね。

半田 関学にはそういう自由な考え方が身につく校風があるのかもしれない。嶋本先生が関学出身だったといいますが、具体美術協会のメンバーのうち、リーダーである吉原治良をはじめ嶋本昭三、村上三郎、吉原通雄などの4人が関学同窓です。日本が世界に影響を与えた美術として、具体は浮世絵と並んで称されるほどの評価を受けています。現代美術の先駆者が関学同窓であることは、もつと誇りに思っているのではないかと思います。



嘉納秀樹(かのうひでき) 神戸生まれ。1973年経済学部卒業。卒業後大日本印刷株式会社、約四半世紀を商業印刷部門で、残りを電子メディア部門で勤務。2016年定年退職し、ギャラリー「Space31」を開設。

もつと気軽に、自由に 現代アートを楽しんで

半田 ギャラリーの運営はいかがですか。

嘉納 作品を見る立場として、単純におもしろいというのが一つ。そしてもう一つは、作家と一緒に展覧会をすることで、作品に対して理解が深まるというところがうれいんですね。場所を提供するだけでなく、一緒に作る喜びです。神戸で活動する現代美術家・山村幸さんのコンセプトアルアートで「御影生活」という展覧会では、ギャラリーで実際に生活されました。自作のベッドで寝泊まりされて、昼間は出

のが妻です。彼女はずっと作家活動をしていますから、その影響は大きいですね。ギャラリー運営では、妻が企画を立て、私が実務を担当していますが、今はまだまだ手探りの状態です。

クリエイティブに 生かせる空間

嘉納 嶋本先生と出会う前から、美容関係のお仕事をされていたそうですが、関学出身で美容関係のお仕事

動してね。私からの伝言メモが壁に貼られてそれが作品の一部になったりして。すごく面白かったですね。

半田 現代美術を分らないという人は、こういうのを見て「なんで、こんなことするの？」って思うんですよ。でも、それでいいと思います。嶋本先生も「芸術とは人を驚かせることである」と言っています。あと、ギャラリーは作家の成長が見られるのいいところですよ。嶋本先生は、京都教育大学や宝塚造形芸術大学(現・宝塚大学)の教授でしたが、教え子たちが海外で展覧会をするようになると、私もその活躍をとてもうれしく思います。

嘉納 私のギャラリーでは、片方をサロンにしています。展覧会期間中はできる限り作家を迎え、訪れた人と交流できるようにしています。

半田 アートって発想を豊かにしてくれるんですね。これからは、教育の世界でも決まったことを教えるよりも、多様性や創造性を重視していくことが必要になると思うんです。その点でも現代美術にふれたり、作家の考え方にふれたりするのはすごく刺激的なことだと思います。

嘉納 現代アートやギャラリーというのは、一般的に敷居が高いと感じられがちですが、もつともつと気軽に感じてほしいと思いますね。

半田 そうですね。研究者ではないのだから、五感で感じて自由に楽しんでもらいたいです。